



喜多 一美
理事（総務・戦略企画担当）



玉木 春香
合同会社ホームシックデザイン
副代表



高橋 和氣
株式会社Wakey 代表取締役/
地域協創教育センター客員准教授



平尾 清
地域協創教育センター特任教授

岩手大学では、地域の多様なステークホルダーとの協創による教育(正課教育と地域社会を实践の場とした正課外活動との循環・接続を図る教育)を实践することにより、高い専門性と実践力を併せ持ち、社会の様々な視点から直面する課題を理解し、解決に向けて自律的に判断・行動ができる能力を持った「レジリエントな人材」の育成を目指し、令和5年9月に地域協創教育センターを設置しました。

令和6年2月に地域協創教育への理解を深めていただくことを目的に開催したスタートアップ・シンポジウムには、想定の倍以上となる150名以上の方に参加いただき、地域からの本取組への大変高い関心と期待が寄せられていることを実感しました。

本特集では、その中で開催されましたパネルディスカッションの内容をご紹介します。

地域の未来

平尾：早速ですが、「地域協創で未来の地域社会を構想する」をテーマにお話を進めたいと思います。まずは「地域の未来」について、どのようなことを感じますか？

玉木：皆さんこんにちは。合同会社ホームシックデザインで代表代理（※開催当時）をしております玉木と申します。私自身、2019年まで岩手大学の学生として講義を受けていまして、5年前に卒業し、今は社会人として県内で働いています。「地域の未来」という観点ですと、例えば既に就職している同級生と話す中で、仕事・やりたいことが無いという理由で他県に出てしまった同級生でも、やっぱり子供は岩手で産みたいという話をしている人もいます。そういった仕事と生活のバランスというところが、若者というか自分の周囲ではキーワードになっているなど最近思っています。雇用がもっと増えれば良いな、というのが正直な感想です。

平尾：仕事と生活のバランスは重要なキーワードにあげられる点かと思えます。こういった若者の

意見がありましたが、喜多理事は大学の立場として「地域の未来」について感じることはありますか？

喜多：教育・学生担当（※開催当時）の理事・副学長の喜多です。地域協創教育センターのセンター長を兼任しています。還暦も過ぎていますが、この中では私が一番未来が無いと思っています。（会場、笑い）

私自身、長い間大学の中において、学生とはたくさん接していますが、一般社会に出た経験はありません。いわゆる「象牙の塔」の中にかれこれ40年いる人間ですので、皆様と少し感覚がずれているかもしれません。私が農学部で実際に学生と関わって来て、最近の学生は大きく変わったと実感しています。少なくとも私が学生の頃とは全然違います。まずは「時間の問題」です。学生は時間に非常に敏感です。かれこれ十数年前から、学生が研究室を選ぶときに、「先生の研究室にコアタイムがありますか？」と必ず聞かれます。それに対し、私は「ありません。自由です。」と答えています。それが研究室を決める決め手になるかは分かりませんが、とにかく学生自身が自由になる

時間を非常に気にしている、ということを感じています。皆さんがお勤めしている会社でも、フレックスタイムやオンラインを導入しているなかで、時間管理を気にされていると思います。今の若い人には、自分の時間を使いたいという考えを持つ人もいますので、コアタイムがあるのは嫌がるのかな...と感じています。

皆さんが会社で新入社員を採用して仕事をさせるときに、今のような感覚を理解していただけると、もしかしたら突破口になるのではないかという気がしています。

平尾：ありがとうございます。若者視点でいくと、時間に縛られないということ。また、東京と比較した場合に盛岡は縛られているのか、縛られていないのかという点も重要なのかなと思います。お二人の話をきいて、高橋さんはいかがですか？

高橋：地域協創教育センターで客員准教授として関わっています高橋と申します。盛岡市出身で、Uターンして7年くらいになります。企業の新規事業立ち上げや、例えば大船渡の就学支援員の方々と、地域づくりやまちづくりをどのように進めたら良いのか、といった様々な仕事をしていますが、改めて岩手の地域と関わるようになってから共通して感じているのは、先ほどの平尾先生の講演の中であった「クラフティング」^(※2)だなと思いました。作り続けていかなきゃいけないな、ということを実感として持っています。出来ないことに対して、クラフティングしながら、自ら学び続けながら、やっていかなきゃいけないとヒシヒシと感じています。自分自身、子供の頃から盛岡で育っていく中で、「未来は与えられたもの。ルールがあってそれに対して自分が歩いていくもの」と思っていました。しかし、大人になってみて、この地域社会で色々な方々と協創しながら活動していくなかで、「クラフティングしていく、自分たちで一緒に作り上げていかなきゃならない。そのことで明るい未来が作れていく。」と感じるようになりました。

平尾：今の話ですと、高橋さんとしては、地域の未来の明るさを感じている？

高橋：そうですね。「明るい未来を作っていく」ということです。それは、自分たちがどうやるかによる、ということだと思います。「明るい未来が与えられていますよね？」というよりは、「明るい未来を作っていく」という考え方が大事だと思います。

平尾：喜多先生の話で自由度といった話がありましたが、そういう部分も若者の明るさに影響するのかもしれないですね。、喜多理事、今の若者の話を受けて地域の未来について改めてどう思われますか？

喜多：私が大学の運営に携わっているなかで、地域の未来ということを見ると、正直に言って悲観することが多いです。皆さんご存じのように、日本の人口はこれから将来8割ぐらいまで減少し、特に東北地方はこの先10～20年の間に7割近くまで減少すると試算されています。それを聞いたときに、果たして岩手大学に学生が集まるのか、

これは本当に頭が痛い問題ですが、そういうことばかり考えていると暗い気持ちにもなります。でも、諦めてはいけない。若い人がどんどん出て行ってしまふ、特に20代前後の女性が都会に出て帰って来ないというのは県として大きな問題だと理解していますが、こういった現状の中でどうしたら明るくなれるのかと考えると、チャンスはあるのではないかと考えています。例えば、若い人とコラボレーションする、そうすることによって新しいアイデアはたくさん生まれてくると思います。学生は任せると頑張るんです。それが失敗、あるいはこちらの意図しているものと違ったりすることもあります、その中に

「おお！」と思うこともあります。ですから、恐れずに任せる、失敗しても叱責しない。これが大事だと思います。そこに地域の未来を明るくするヒントがあるような気がします。

平尾：ありがとうございます。未来というキーワードを考える中で「任せる」という部分がつながっているように思うのですが、玉木さんいかがですか？

玉木：私自身が入社して3年目ですけども、代表に次ぐ代表代理という役職（当時）をいただいております。期待されているということに対しては非常にポジティブな思いでいます。学生もそうだと思いますが、「学生だからね」という上限が決まっているような頼まれ方ですとか、「若いから何も知らないよね？」という雰囲気は若者側も敏感に感じ取っていると思います。任せられることに関して言うと、その期待に応えたい、あるいは任せられることにポジティブなマインドがある学生に対して、きちんと機会が用意されているということが大事じゃないかと思います。高橋さんはいかがですか？

高橋：それはとても大事だと思います。どうしても、自分のやり方が正しいからこうやってと言ってしまうがちですが、それが結局任せられないことだと思います。これからのVUCA時代、未来が分からない時代において、考えて動いて、0から1を生み出し続けなければならない時に、動いていくことが大事になります。その時に、任されることで失敗しながらも様々なことを考えながらやっていくものだと思います。こちら側の思惑と



違うことで出てくるかもしれないので、それを含めて面白がりながらやっていくと、新しい価値が生まれるのかな、と感じました。

平尾：先ほどお話ししたOECD EDUCATION 2030 (※3) の中でも、「若者にもっと責任を」と「任せろ」という言葉がキーワードとして挙げられています。そうしないと、明るい未来は作れないと考えられています。本日のシンポジウムに参加されている皆さんにお伺いしたいのですが、所属している身の回りを見て、若者に十分権限・責任を与えて任せているということをご自信もって言える方は挙手をお願いします。

(6割ほど挙手)

これを多いと見るか、少ないと見るか、喜多理事いかがですか？

喜多：挙手いただいた方は、おそらく地域の中小企業の方が中心ではないかと思っています。というのは、年末の日経新聞に「大企業を3年以内に退職する割合が2010年の時点で20%、それが2020年には25%に増えている」という記事が掲載されていました。それが何故かという、研修がキッチリしていて、ホワイト企業が増えている状況にあります。逆に若い人はそれが我慢できない。つまり、自分が伸びている気がしない、任せられてないと感じてしまう。大企業こそそういう状況になっているのかなと思いました。今の割合を見て、少ないとは思いませんし、逆にもう少し増えてもらおうと良いかな、という期待があります。

高橋：岩手にはそういった中小企業の方々がいっぱいいるので、可能性に満ちているということですね。

喜多：そうですね。学生の気質は昔と変わっています。学生の就職時の採用面接では、学生は身構えているので本音はあまり見えないと思いますが、今回我々がイーハトーヴ協創ラボ (※4) のような学内ワーキングスペースを作って、そこで皆さんが学生と一緒に活動する、そうすると学生は本音を出してくると思います。ぜひ皆さんにはワーキングスペースをご利用いただいて、今の学生を感じていただきたいと思っています。

玉木：今の喜多理事のお話で、地域の中小企業という部分が印象的だったのですが、自分自身、最初は従業員100名以上の会社に就職したのですが、入社して5年になったらリーダーになって、10年くらい経ったら課長になって...と年数が決まっていたので、熱意や能力があってもそこで登用されない、ある程度年数を経ないと任せてもらえないという状況でした。転職する年数がどんどん短くなってきているなかで、企業に従属して企業に貢献するという意識よりは、良くも悪くも自分のキャリアを考えたときに、この会社に所属しているうちにここまで出来るようになりたいという思いがあるのではないかと思います。大企業に入りたいという思考の人もいますが、チャレンジする土壌が全然違うのかなと思うので、どちらにも良さがあると思いつつも、自分にとっては今の会社の方が合っていると感じています。

そのように個人的に思っているなかで、いろんな方が手を挙げてくれて嬉しいな、と感じたのが正直な感想です。



高橋：もっと少ないのかなと思っていましたが、想定より手を挙げる人が多かったのは、ここ数年の危機感の表れかなと思っています。世の中の人々が完全に流動化していて、昔は終身雇用ですと務めるということだったと思いますが、実質崩壊してきています。そのなかで、「どういう会社に入るか」というよりは、「どう生きていきたいか、どういうキャリアを歩んでいきたいか」といった「生き方、価値観」にシフトしてきていると感じています。そのステージに対して、自分たちの組織はどう貢献できるか、ということが時代の変化みたいなことかなと思ったりしています。それが大都会だけでなく、コロナなどを経て、リモートワークも増えたことで、岩手の地域社会の中にも「浸食」してきている、そういう未来が生まれてきていると感じています。

平尾：今の話を聞いて、皆さんどうですか？これからはもっと若者に任せたいと感じた方、今やりかけているぞという方も挙手をお願いします。

(9割ほど挙手)

おお、素晴らしいですね。ありがとうございます。玉木さん、この結果についていかがですか？

玉木：企業自体が素晴らしかったとしても、例えばその企業の人事担当者が好きで入社したとしても、人事担当者とは仕事をしないという落とし穴があるわけじゃないですか。普段1日8時間、週5日働くという時に、言葉は悪いですが、「上司ガチャ」というか、どんな方が指導者になるのか、とても長い時間共に過ごす方になると思うのですが、尊敬できる方なのか、マインドが自分に近くてそういう人になりたいと思える人が近くにいるかは、人生の中でとても大きなことだと思います。若者にも機会ですとか、登用したいという思いを持つ考えの方が上にいるということが、すごく大事というか必要なことではないかと思えます。就職するときにそこまで見えないかもしれませんが、収入や待遇を重要視する方もいれば、ビジョンやその会社で何ができるのかというところを見る学生もいるので、そういう学生には

すごく刺さるのではないかと思います。

平尾：まさにイーハトーヴ協創ラボでは、学生の皆さんの魅力を感じたり、ナチュラルに学生と企業関係者がコミュニケーションを取ったりすることができる。人事部門の方と仕事をする訳ではないという名言をいただきましたが、もっとカジュアルな、普段着の皆さんの魅力が見える、伝えられる機会としてイーハトーヴ協創ラボを活用してもらえたらと思います。

学生の未来

平尾：地域の未来の話をお話してきましたが、続いては「学生の未来」についてお話を伺いたいともいます。先ほど、喜多理事よりこれまで学生の変化についてお話をいただきましたが、これからの学生の未来についてどのようにお考えですか？

喜多：学生の未来は結構明るいと思っています。最近の学生を見てみると、しっかりと主張をします。先ほど上司ガチャという発言もありましたけど、昔はもっとひどかったと思いますよ。上が言ったことは絶対。上から押さえつけられ、理不尽なことを言われ...、それがいわゆるブラック企業ということになるとは思います。今はそういうこともほぼ有りませんし、自分の意見を言う学生も増えています。だから学生は少なくとも我々の頃よりは自由だと感じています。しかし、一方で若い人は少し責任が伴っていないと感じることもありますので、その点はしっかり教育していかなければならないと思っています。

また、私の所属は動物科学とあって、昔の畜産系の学科なのですが、私の教えた学生の中でもITベンチャー系企業に就職する者も増えています。今の学生は専門に縛られず自由に動ける者も増えていますので、そういう意味では学生の未来は、決して悲観的なものではないと考えています。一方で、旧態依然の価値観に囚われている学生もたくさんいます。この世の中は二極化していると言われるかもしれませんが、学生の未来も二極化あるいは多極化していくのかなと思っています。ただ、全部が決して暗いとは思っていません。明るい未来もあると思っています。



平尾：ありがとうございます。学生の未来は明るい、というお話をいただきました。高橋さん、学生の未来についてはどのように考えていますか？

高橋：最近の色々な人と話をしている、「最近の学生マジメだね」という話題になることが多いです。これは独自の理論ですが、自分が学生の頃と今の学生は違うな、と思うところがさまざまあります。冒頭で話をしましたが、自分が学生の頃は、信じている未来や、画一的なレールのようなものがあって「そこに乗っておけば良いのでしょ？」といった風潮がありました。そこに乗っているかをみんなが気にしていて、そこから少し外れてはみ出た生き方をしたいとか、一本のレールに対して、そこからちょっとはみ出することは「真面目じゃない」という考え方があったような気がします。しかし、今の学生が置かれている環境には、一本のレールみたいなものが無い気がしています。レールが無いから、自分で選択していくしかないです。その中で、「私ってどう生きるら良いのでしょうか」という学生もいれば、「私ってこういう生き方をしていきたい」という学生もいて、すごく複線的になっているなということに対して、我々がどのような支援や促しをやっていけば良いのかを考えるとところもあります。学生の未来って本当に多様なんだなって思ったりもします。それは、例えば公務員を職業として選ぶこと、その中でも多様な考えがあると思いますが、それを「変革していく側で生きよう」という考えもあれば、「親に言われたから」という考えもある。これは全然違う未来になるはずなので、本当にすごい多様化しているなと思ったりします。

玉木：明るいと思いつつも、それは今の学生が作ったものではなく、少し上の世代だったり、社会的な時勢でホワイト企業になったりとか、ダイバーシティを大事にとった環境があって、今の明るい状態が用意されているのかなと思うんです。その次を作っていくという気概をもっていけないと、維持しようとする衰退していく運命にあると思います。また、先ほど職業選択に関する話題がありましたが、私の周りでは、親や祖父母から「公務員になれ」とプレッシャーをかけられる友人が多かった印象です。自分自身、就活について不安や悩みを抱えている中で「大丈夫なのか？」と家族から不安を煽られるのって、きついですよね。そういった圧力に対して「大丈夫にしていくしかない！」という気概があれば乗り越えて行けるのかもしれないと思いますが、自分も不安だと、職業の選択肢を広げることさえなかなかできなくなるような気がしています。

地域連携の可能性

平尾：次の話題に入ります。地域連携の可能性について、喜多先生いかがでしょうか？

喜多：もともと岩手大学は地域連携をかなり進めてきた大学であり、岩手もそのような地域だと思っています。そのマインドは今も生きていますし、地域連携の可能性はまだこれから広がっていくと思います。

今日のシンポジウムにも100名を超える個人・団体の方が外部からお見えになっています。この後に情報交換会もありますので、地域連携の可能性はさらに広がることになると思います。私は岩手県における地域連携の可能性についての未来は明るいと思っています。

高橋：産学連携については他県に比べて早くから生まれてきた土壤があると感じていて、実際にINSなど様々な産学官連携の活動が40年以上前からスタートしています。その先輩方が培ってきた土壤が岩手県にはあるなというのを思うことの実感として、現在、産学官連携によるリカレント教育事業ということでコーディネーターを担当していますが、他県の状況を聞くと産学連携の土壤がない、今から作らなくちゃいけないというところが結構多いなと感じています。そういう中で、岩手県が長い年月をかけて培ってきている産学官連携の実績を、こういう仕事に関わるまで僕自身はあまり知りませんでした。自分たちが次にバトンを渡していくのも含めてなのですが、培ってきた土壤をさらにアップデートさせていくことがすごく重要ななと思っています。それを、今回のイーハトーヴ協創ラボのような場で実践できれば良いと思っていますし、その土壤を踏まえてさらにそれをクラフティングしていくということが重要になると感じています。そういうことをすごくやりやすい地域だし、そこから価値を見出していければ、と思っています。

玉木：こういう連携をするときに重要な位置の方が必ずいると思いますが、一方で性質的なところだと思えますが、「群れたくない」という方も一定数いると思っています。自分ひとりでやっていきたい、私は別に連携しなくても良いと。でも、地域の活性化を考えたときにぜひその輪の中に入れていただきたいというステークホルダーの方もいらっしゃると思うので、その巻き込み方がポイントになるのかなと思っています。輪の中に入っていないから連携ができないということではなくて、それぞれフィールドでやっていくことがいづれ繋がるということもあるとは思いますが、そこでもったいないロスが生まれないようにすると良いのかなと思います。

高橋：この1、2年の中で、玉木さん自身も、色々なところと連携するところに関わっていると思いますが、キーポイントって何か感じますか？

玉木：お願いをしに行くときに、「活動にはとても賛同しているけど、自分の店とか企業でやっていることが、協賛という形ではなくてもつながっていくと思うので」という話で、やんわりお断りされることがあるので、高橋さんの質問のポイントというところはまだ正直掴めていないというところですか。お声掛けするタイミングですとか、立ち上げに必ずしも声をかけていなくても良いのかなと思うことはあります。

高橋：完成形を作って、いきなり「やりましょう！」ということではないですよね。その時の話からだけじゃなくて、その先で生まれることもありますよね。

玉木：最初に断ったから合流できないということではなく、お店だったり企業さんのお考えだったりとか状況も変わると入って来ることができる。その時の方が良かったりするということもあると思います。そういう性質があるのが今回のような場だと思うので、その余地というか余白があるとすごく良いのかなと思っていました。

喜多：地域連携って、結局人と人との繋がりなのかな、と思います。人と話すことによって、自分のモヤモヤがまとまるってことがあると思います。私自身、大学で研究をしています、研究でモヤモヤすることっていっぱいあるのですよ。答えが無い、分からない。その時に学生でも他の先生でも話をしていると、ある時に頭の中ですっきりまとまるということがよくあります。それから、話をしていると、相手にとって当たり前なのが、自分にとってのものすごく新鮮ということが結構ありますよね。皆さんが異業種の人と話をするなかで、「それってうちには全然無いよね、でもこれ使えたら面白いよね。」ということがあったらもう占めたもの、だと思います。こういう交流の場、人と人とのつながりが地域連携の一つの肝だと思います。



イーハトーヴ協創ラボに期待すること

平尾：続いて、イーハトーヴ協創ラボに期待することや、楽しみだな、ということがあればお願いします。

玉木：このお話をいただいたときに、関わっている運営の皆様にお伝えしましたが、自分もイーハトーヴ協創コースを取りたかったな、あと6年くらい早く始めてくれていたらな...、と思っています。率直に言うと、今の若者っぽい発言になってしまっていますが、このプログラムに関わることで自分自身の成長につながりそうだな、と思っています。私は、ペーサー^(※5)としてこのプログラムに関わらせていただく予定ですが、自分自身のキャリアですとか、どういう生き方・働き方をしていきたいかというところが学生さんと話す中で、自分自身が研ぎ澄まされていくような予感がしています。元々いろんな人に会うのがとても好き

なので、いろんな出会いが生まれていくというところ、後はこれが「点」ではなくて「面」になっていく予感がしているので、早くやりましょう！という気持ちです。

高橋：アントレプレナーシップを醸成していくことは大事だと思っていますが、狭い意味で捉えられがちだと思うことが多いです。「ビジネスリーダーや起業家を生みだしていくこと」という狭い意味でのアントレプレナーシップも、それはそれで正解だとは思いますが、今回の協創コースや協創ラボもそうですが、広い意味でのアントレプレナーシップ、つまり社会を色んな意味で変革を起こしていこうとすること、その変革を起こすことを応援する人も含めて、それぞれが「内なるアントレプレナーシップ」を持った人材を生み出していくような場になること。岩手で色々な活動していく中で、変化を起こしたいけど難しいという状況を変える起点になっていくかもしれない、そういうことが出来ていくステージになっていくのがワクワクします。皆がアントレプレナーになれるよ、というところがポイントだと思っています。

喜多：主催する側の立場の人間ではありますが、これだけ多くの人に集まっていたら、正直びっくりしています。なにか起きるのではないかとすごくワクワクしています。同時に背筋がとても寒いです。なぜかという皆さんの期待があまりに大きいからです。責任重大だと思っています。これからは如何に、学内のリソース、教員・学生を巻き込んで皆さんとリンクさせるのが一番のポイントだと思っています。それが実行できればこのワクワクポイントは二乗にも三乗にもなっていくと思いますので、ぜひ皆さんご協力をお願いします。

高橋：特に研究者の方々と一緒にできると良いと思っています。それで、研究者の方と企業の方が結びついて、新たな研究分野が生まれていくと良いなと思っています。

喜多：まさにその通りで、大学は研究する場ですが、研究と皆さんとをつなぐ。今までもURAというポジションがあって、先生を紹介するといった連携も行っていますが、それをもう少し強化して、実際にアントレプレナーのように起業化に

結び付くようなところまでを踏まえた体制が必要ではないかと思っています。今までは「先生の成果を還元しましょう」くらいだったのですが、そうじゃなくてもう一段、二段先を見据えて強化すべきだと思っています。

メッセージ

平尾：ありがとうございました。それでは皆さんから最後にメッセージをお願いいたします。

玉木：改めまして皆さん、本日はお時間をいただきましてありがとうございました。本日はシンポジウムということで、この会の立ち上げ、一歩目だと思います。今日、運営の皆さんのお話を聞いていただいて、ぜひ積極的にご提案いただけると良いと思います。せっかく多くの人に集まっていたので、学生の声を入れつつ、大人の皆さんで岩手を面白くしていけたらなと思っています。岩手に若者が戻ってきてくれるような、そんな場所になっていけたらと、私自身も思っていますので、引き続きよろしく願いいたします。今日はありがとうございました。

高橋：先ほど平尾先生の資料の中で「アンロック」^(※6)という話が出て、学生の未来を拓くために、学生の心も含めてアンロックしていくということだと思いますが、一つ印象的なエピソードがあるのでご紹介したいと思います。僕は株式会社イノベーションラボ岩手が運営している「いわてイノベーションスクール」の主任講師を務めています。当初は学生と関わる中で、最初はある程度心を開いてくれなかったな、という感想を持っていました。僕の接し方も含めて、やっぱりそれには時間かかるかなと思いました。その中でだんだん心を開いてきてくれて、そのうちの一人の学生から言われた言葉が結構印象的でした。その学生は岩手県内出身で、自分では「外にどんどん出ていきたいと、切り開いていきたい」という思いがあったけれど、大学進学時に親から、「お前は男の子だったら県外に進学させてあげられたのだけだね。」というようなことを言われた、と。平成の末期でもそういうこともあるのだなと。これは単純な背景ではなくて、すごくさまざまな事情が複雑に絡まっていて、親としてのいろいろな感情とかもあるし、その学生も親のことも大好きだし、すごい葛藤がある中で、自分は県内の大学を選択するしかなかった、という状況でここにいる。このような「ロックな状態」を我々はどうやって外していくべきかということが非常に問われているなと感じました。その学生は、その後、色々な大人と触れ合っていく中で、「自分の道はこう進むべき」という思いが明確になり、そこから頭がアンロックされていきました。自分の就職先は自分で選択して、社会人になって、「今こんな仕事を任されているのですよ」というすごくハッピーな報告も受けています。やはり大事にしたいのは置かれているそれぞれの環境の中で、自分たちのequity（公平性）を作っていくという意味でも、そういうチャレンジをやり続けていきたいなと思いますし、そういうことに共感して



くださる方と一緒に色々なことをしていきたいなと思います。

喜多：私からのメッセージということで、付け加えてお話しさせていただきますと、私は普段から学生と多く接していますが、若い人は本当に化けます。私自身、ビックリする大化けをした学生を過去何人も見てきました。皆さんも若い人を採用することもあると思いますが、新入社員・若手社員を化けさせることができれば、会社は勝ち、ではないかと私は思います。そのためにはいろんな方策があるかと思いますが、まずはいろんな方と話をし、情報を得る、思い付きを一つでも二つでも実現につなげていく。そうしたことがやはり重要かと思っています。ぜひ、異業種の方と特に話をされて、ヒントを掴んでいただければと思います。大学としても、精一杯頑張りますので、これからもよろしくお願いいたします。

平尾：皆さんご協力ありがとうございました。今日の参加者は当初予定の倍となる150人でしたが、これが2回目は学生を含めて300人が集う会にしていきたいと、そういう決意を込めて拍手で終わらしましょう。ありがとうございました。



用語解説

※1：イーハトーヴ協創コース

<https://www.iwate-u.ac.jp/rcec/ihatov-course.html>

全学の学生が受講可能な岩手大学の新しい学修プログラム。地域社会の多様なステークホルダーと連携・協働しながら、正課教育と地域社会を実践の場とした正課外活動との循環・接続を図るプログラムをコースに設置し、高い専門性と実践力を併せ持ち、社会の様々な視点から直面する課題を理解し、解決に向けて自律的に判断・行動ができる能力を持った人材を育成する。

令和6年度から段階的にコース科目を開講し、令和7年度から実装予定。

※2：クラフティング

イーハトーヴ協創コースのカリキュラムデザインコンセプト。本コースでは、「自らの学びをデザインする力」の涵養と「学びを深め、行動につなげるサポート体制」の構築を軸に、未来を構想し、変化を生み出していく人材を育成していくことを目的に、学内及び地域の多様なステークホルダーとの協創によりコースを設計している。

※3：OECD EDUCATION 2030

<https://www.oecd.org/en/about/projects/future-of-education-and-skills-2030.html>

東日本大震災を契機に行われた「OECD東北スクール・プロジェクト」がきっかけとなり、2015年にOECD（経済協力開発機構）が立ち上げた教育とスキルの未来を構想するプロジェクト。複雑で予測が困難な2030年の世界を生き抜くために、生徒たちに必要な力は何か、そしてそれをどのように育成するのかといったことを検討している。

現在までに第一段階の検討が終わっており、「ラーニング・コンパス」という学習の枠組みを提唱。そこでは「エージェンシー」という力が注目され、また2030年の目標である「ウェル・ビーイング」を達成するために、どのようなコンピテンシーが必要なのか、という概念図が描かれている。

イーハトーヴ協創コースではOECD EDUCATION2030が提唱する「変革を起こす力のあるコンピテンシー」を、コース全体をつなぐ共通概念として取り入れている。

※4：イーハトーヴ協創ラボ

<https://www.iwate-u.ac.jp/rcec/ihatov-lab.html>

地域と学生、教職員との協創活動を恒常的に促すとともに、新たなアイデアや取り組みを創出する場として令和6年秋に中央学生食堂2階に設置予定の学内ワークスペース。

オープンな環境とセキュアな環境の両立を兼ね備えた学修・交流スペースとしての機能に加え、施設内にコミュニケーションコーディネーターを配置し、利用者（学生・教職員に加え、企業・団体関係者、卒業生等）それぞれのニーズを把握しながら、課題解決や協働を促進するための各種ソフト事業を多様に展開する予定。

※5：ベーパー

イーハトーヴ協創コース内に独自に設定された現役社会人のサポーター（メンター）。自らの力で学ぶ能力を育むとともに、世代を超えた「対話の機会」を増やし、キャリアの多様性を理解することを目的に、コース全体として、授業の枠を超えたメンタリングやコーチングの機会提供を行っている。

令和6年度は県内外の多様な場で活躍する現役社会人（卒業生を含む）16名を配置し、受心理的安全性を大切にしながら、受講者の学びを伴走支援していただいている。

※6：アンロック

https://www.iwate-u.ac.jp/rcec/upload/b6972760e690cf9cf370dcf8afd90cf0_1.pdf

必修科目「地域協創入門」のコンセプト。同科目では「自らの学びをデザインするための基礎力を身につける」とことと、自身の現状の思考や行動の制限からアンロック（解放）された状態を目指す」をキーワードに、デザイン思考やコミュニケーションに関する多様な手法を学び、VUCA（変動性・不確実性・複雑性・曖昧性）の時代の特徴理解、多面的なスキルと柔軟性のあるマインド育成、多面的なスキル開発及び加太解決基礎能力の育成を図っている。

なお、同科目は1年生を対象に令和6年前期から科目を開講したが、当初想定の倍近くとなる約230名（収容定員の約2割）の学生が受講する人気科目となっている。